源流の四季

第19号（2005年10月）秋
Autumn

発　行　所／多摩川源流研究所　〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村4383
TEL 0428（87）7055　FAX 0428（87）7057
http://www.tamagawagenryu.net
E-mail:genryu@mxa.cosmo.ne.jp
発行責任者／中村文明
協　　力／多摩川源流協議会（塩山市・奥多摩町・丹波山村・小菅村）
多摩川源流観察会
印　　刷／（株）サンニチ印刷

臥竜（撮影　中村文明）

Contents 目次

自然再生協議会に東京電力が参加……2
自然再生協議会事務局会議……3
源流体験特集……4〜5
多摩川下流の水害（2）……6
秋のイベント紹介……7
いろりばた教室……7
第6回全国源流シンポジウムのご案内……8

東京電力が多摩川源流自然再生協議会に参加

森林再生や多自然型川づくりなど源流らしさの復元を目指した第4回多摩川源流自然再生協議会が、7月7日に小菅村役場で開催された。協議会には、地元小菅村の委員や流域の市民、NPO法人の代表、環境省、国土交通省、林野庁、山梨県等の代表など46名が参加した。

持続可能な森林経営モデルの確立へ

あいさつする東京電力の代表（7月7日　小菅村）

多摩川源流自然再生協議会では、宮林茂幸会長（東京農業大学教授）が「今回の協議会では、源流らしさを求めて自然再生の全体構想を練り上げていくことが大きな課題である。前回の協議会で設置が決まった源流景観部会、森林再生部会、源流文化部会において良く意見交換し様々なアイデアを出して欲しい」と挨拶した。小菅村の廣瀬文夫村長は「昨年度の国土創発調査で様々な調査が実施されて源流再生の大きな方向と課題が明らかになった。森林再生や源流景観復元など源流らしい村づくりにより一層ご協力をお願いしたい」と参加者を激励した。

続いて東京電力環境部グリーンサポートグループの矢野康明マネージャーが「地球温暖化防止の取り組みがいよいよ重要になっている。東京電力は地域との協働による森林保全活動を推進したいと考えている。持続可能な森林経営モデルの確立を目指して多摩川源流自然再生協議会に参加したい」と発言、東京電力の自然再生協議会への参加が承認された。

自然再生協議会事務局の中村文明所長は、「今回の源流協議会において、新たな動きが顕在化してきた。東京電力が持続可能な森林経営のモデル事業を目指して多摩川源流自然再生協議会に参加することを表明した。参加表明した背景は、『小菅村・源流研究所の取り組みには、次のような他にない取り組みの姿勢がある』として、

（1）源流資源を流域の共有財産と位置づけて、流域管理することを求め、持続的な自然資源の保全を追求していること

（2）森林再生プロジェクトに関して東京農大などの参画により、専門的、先進的な知見を積極的に取り入れていること

（3）補助、寄付にのみ頼ることなく、経済的な自立を追求していること

（4）多摩川源流域市町村との連携、下流域との連携、全国の源流地域との連携を積極的に推進し、自らの利益のみを追求することなく『協働』『共生』を基本にしていること

の4点を挙げている」ことを紹介した。

景観部会からの報告

自然再生協議会は、午後から分科会に分かれて意見交換した。意見交換が終了したあと、各分科会の座長から報告が行われた。

景観部会に関しては、座長の宮林会長が、「この源流景観部会の基本的な考え方は、自然、川、人との連携を基本的な景観軸におく。宮川を見に行ったが、川と神社と城跡が立体的に繋がるような大変拠点整備としてふさわしい場所であることがはっきりした。基本的に川遊び、川の教育、神社の文化など宮川の再生事業をスタートさせていきたい」と報告した。

森林再生部会からの報告

森林再生部会からは、菅原座長が「先ず、資源の循環を中心に据えよう。森林所有者としっかり協議を行って、合意形成を図りながら小菅村の森林をゾーニングしていく。村有林を活用した先進事例を検討し実施する。さらに今川森林団地を整備し、持続的な森林管理のあり方を検討しよう。一番の問題は将来に渡って森林の管理が継続されることである。小菅ならではの山引苗を育て、小菅村の産業に繋げていきたい」と報告した。

源流文化部会からの報告

源流文化再生部会では、小泉座長が「源流文化の再生とは何か、特に文化の再生という点から水と緑と人を軸に意見交換した。食文化、教育、風俗、風習について話を進めた。食文化については、雑穀が健康に優れているのでいいんじゃないか、教育面では、『森の幼稚園』や『源流体験教室』など自然の中でなければ絶対にできない教育が小菅の教育らしいといえるのではないか」と報告した。

協議会では、最後に宮林会長が、「今日の専門部会での議論をより深め、今年度中に全体構想がまとまるよう取り組みを強めていきたいので委員のみなさんのご協力をお願いしたい」と閉会の挨拶を述べた。次回の自然再生協議会を11月10日に開催することを確認して散会した。

村有林先進事例モデル事業など具体化へ

自然再生協議会の事務局会議開く

村有林先進事例モデル事業など
自然再生協議会の事務局会議開く

多摩川源流自然再生協議会の事務局会議が、8月31日、東京農業大学7号館会議室で行われた。事務局会議には、宮林茂幸会長、矢野康明東京電力環境部マネージャー、青柳諭小菅村源流振興課長、中村文明事務局長ら6名が出席した。第4回多摩川源流自然再生協議会の協議を踏まえて、森林再生事業の具体化を検討した。今川森林団地化整備事業や村有林先進事例モデル事業、地域性苗木養成事業、緑のボランティア事業等について協議し、次の課題を森林再生部会に諮りその確認を得て取り組むことになった。

1 森林再生の基本方向について

日本は従来、植林して40～50年ですべて伐採・皆伐するという短伐期・皆伐をとってきた。それは、木材価格が充分に高い反面、人件費が安かった戦後まもなくに考え出された方式であるが、現在はそうした前提が崩れているにもかかわらず短伐期・皆伐に変わるモデル・政策が提示されていない。今後は、長伐期・非皆伐方式による森林再生事業の推進が求められている。森林再生の基本方向として、今後、長伐期・非皆伐方式が望ましく、各地の先進的森林組合でもその取り組みが始まっている。

2 今川森林団地化整備事業

多くの山林が当面木材生産による収入が期待できない状況にある。今後、管理を放置し続ければ、より一層資産価値が下がることは目に見えている。こうした現状を打開するために、今川森林団地の森林経営・整備の持続化を図る目的で、森林団地化を検討する。森林の資産価値を上げ、木材生産による収入をあげられる森林づくりに取り組む。その際、資源調査や林相図に基づいた林地区分・ゾーニングが大きな課題になる。資源循環をめざすゾーンとめざせないゾーンを判断していく。こうした取り組みの主体は山林所有者であり、森林組合、小菅村であるが、森林に関係する様々な主体が参加・連携して今川森林団地化整備事業を進めていく。

苗畑づくり（9月10日　農大フィールドスタディーにて）

この際、資源循環をめざせないゾーンに関しては、山林所有者の負担なしに間伐を進める方法を考案していく必要がある。

3 村有林先進モデル事業

ここでは、先進事例のモデル事業を実施していく。その中心に、人工林の天然林化や針葉樹と広葉樹の混交林を目指していく、また、作業道を整備し、伐採木の葉枯らしなど自然乾燥にこだわった間伐材の商品づくりに取り組む。

4 地域性苗木養成事業

地域固有の種を保存していくことの重要性が指摘されている。由来がわかり愛着の持てる植樹をめざし、郷土種・地域種の普及を図る。当面、山引、種播きの両面を追求し、苗木養成に取り組む。苗畑整備、採種樹種の確定、山引苗の採取、山引苗の試験養苗、里親エコツアーなどに取り組む。

5 関東水源の森ネットワークについて

多摩川、利根川、荒川、相模川のそれぞれの流域に働きかけて、関東水源の森ネットワークにむけた取り組みを進める。多摩川源流の経験や川場村の源流域の水資源や森林資源への流域住民の関心を高め、具体的なアクションをおこしていく。経験を基礎に森林再生の輪を広げていく。そのための情報交換と交流会を働きかけていく。

源流体験教室

特集

世代を越えて共感をよぶ

小菅村と多摩川源流研究所は、今年も多摩川源流域に残された本物の自然を伝えるために、源流体験教室を実施した。事業開始から五年目を迎え節目の年となる今年は、体験開始に先駆け課題となっていた参加者の安全を確保するための基盤整備を行った。七月中旬から実施した源流体験教室に十八団体が参加した。また、環境教育の実践例として東京都小中学校環境教育研究会などの教職員研修の受け入れを開始した。

流域を越えた参加団体

子供達が本物の自然に触れることが出来るように源流体験教室を実施している。源流体験のコースは小菅川源流部の川と森。川を八回渡り、倒木を乗り越えたりしながら上流を目指して進み、最後の瞳淵では岩の上からの飛び込み、淵の深さを体験する。この冒険の中で源流の魅力と大切さを伝える取り組みである。

今年は左表の十八団体が源流体験に挑戦した。

平成17年源流体験参加団体一覧

No	月	日	団体名
1	7	16	稲城市向陽台育成会
2		23	川崎水辺の楽校
3		28	狛江市岩戸児童センター
4		29	世田谷アドベンチャークラブ
5		30	とどろき水辺の楽校
6		31	稲城第六小学校有志
7	8	1	狛江水辺の楽校
8		3	三鷹市社会教育会館
9		4	川崎市立宮内中学校
10		6	墨田児童会館
11		7	立川わくわく青少年委員会
12		8	小平ボーイスカウト第五団
13		9	調布市児童館ウルトラキャンプ
14		10	東京都小中学校環境教育研究会
15		11	世田谷区子ども夢プロジェクト
16		18	大田区矢口小学校お父さんクラブ
17		19	港区青山地区委員会
18		21	港区港陽地区委員会

より安全な体験を目指して

道のない源流を歩く源流体験は一歩間違うと大事故につながる可能性を持っている。今までも細心の注意を払い安全管理を行っていたが、今年はさらに安全性を高めるために事前準備や道具の整備を進めた。

まず、河川環境整備基金の助成を受け、子供用ライフジャケットを整備した。これにより台風後、水量が増加している場合に流されても溺れることなく、安全に源流体験教室を実施することが可能となった。また、ライフジャケットの内部は厚い発泡素材であるため断熱性が高く、夏でも冷たい水が流れる源流での飛び込み後の防寒にも活躍した。

源流体験では安全に源流を楽しんで頂くために参加者に長袖長ズボンなどの服装をお願いしている。しかし、口頭ではイメージがしにくく、参加者への周知が難しい現状があった。そこで今年度からは服装などについて絵入りの体験事前マニュアルを作成した。これにより体験を初めて行う団体にも服装などの事前準備を分かりやすく伝えることが可能となった。

源流体験本番では、水量増加時には長さ二メートルほどの竹の棒を携帯し、急流を渡る際には大人二人で棒の両端を持ち、子どもが急流にのまれないように手すりとして利用した。また、急流の上流に参加団体のスタッフが立ち、流れを弱めた場所を子どもが渡るなど指導者と参加スタッフが連携して安全管理に当たれるようにより注意を払い実施している。

源流初体験 ―立川わくわく青少年委員会

今年の源流体験教室に参加した「わくわく青少年委員会」は立川市の団体としては初めての体験である。

流れに負けるな

初めての源流体験に本番前から子どもと一緒に大人もワクワクしながら出発。体験が始まると、水の冷たさや流れの強さに悲鳴が上がったが、子どもたちは釜淵でのロープを使いながら岩場をつたう体験に驚きながらも、軽い身のこなしで岩場を越えていった。

箱めがねを使って淵を覗き、体長十cmほどのヤマメを発見すると「キレイな魚!」と歓声をあげた。源流のきれいで冷たい水が育んだ命を観察することで、源流域を守る大切さを学ぶことができた。

参加した子どもたちは体験が終わり、林道に出てからも自分たちが住んでいる都会とは違う山の様子に興味津々。トンボを追いかけたり、木の葉に触ったりしながら源流の自然を楽しんでいた。

多摩川を比べる ―水辺の楽校

毎年源流体験を行っている川崎・等々力・狛江の水辺の楽校がこの夏も源流体験を行った。それぞれに特色のある各楽校であるが、普段から多摩川下流を舞台に河川清掃や生物観察などを行っている団体なので、自分たちの知る多摩川の源流に行くことを楽しみにしている。

何度も来ている子どももいるのでみんなで助け合いながら源流体験コースを進んでいく。コースの途中でカジカを発見した。多摩川下流ではヨシノボリやヌマチチブはたくさん生息しているが、水のきれい

な場所でなくては生きられないカジカは生息していない。カジカを通して源流域の自然の豊かさを知り感動していた。

また、水辺の楽校では毎年二日目にマスのつかみ取りも行う。ただマスを捕まえるのではなく、マスを観察することでその習性を理解し、自分で捕まえる。その生き物を食べて体の一部にするという体験として行っている。子どもたちは獲物を追いかけることを楽しみながら、普段何気なく食べているものが生きていることを実感した。

自然を学ぶ——流域小中学校

今年は三つの学校関係団体も源流体験を行った。どの団体も子どもたちと一緒に教職員も参加した。

日頃から各団体も多摩川をテーマにした学習を行っており、自然を見る時の子ども達の視線がとても鋭い。同行した教職員は学校とは違う子どもの姿に驚くとともに、源流体験で自然に触れた感動を持ち帰り、授業に活かして行きたいと語った。

大人に知って欲しい源流

東京都小中学校環境教育研究会から環境教育実践研修の一環として源流体験教室開催した。

「総合的な学習の時間」開始から四年目を迎え、学校の中で環境教育プログラムを行う機会が増えている。その題材の一つとして源流域の自然や文化を取り上げるための研修を行うのが目的である。

源流域に残された自然や文化は教員など社会人が人間生活の根本を学ぶための研修素材として注目されている。

源流研究所でも源流域の自然や文化から生きる知恵を学び、広げる活動を実施しており、社会人の中でも特に教職員が源流体験を行うことの意義は大きいと考えている。

学校とは知識のみを教えるのではなく、知ることの感動を伝える場である。若い教職員は教えるための知識はあるが、生きている自然などに触れる機会が少ないまま教職に就いている。実際に知識が生きていることを体験し、自分自身がそのことに感動しなければ、知ることの感動を教えることができないだろう。多くの子どもたちに感動を伝える職業だからこそ源流体験を通じて、知識を教え、その生きている現場の感動を伝えて欲しいと思う。

マスのつかみ取り

源流体験のアンケートを紹介します

新たな発見をしたい

坂を登るのが一番大変でしたが、最後の瞳淵が印象に残っています。また体験に行き、今回気付いていない他のことに気付き、新たな発見をしていきたいです。

（港区小六・女子）

体験全てが興味深い

指導者の服装と道具がしっかりしていて期待が高まりました。瀬の歩き方・森と川と海をつなぐレクチャーと細部に意識を行き渡らせるような自然の見方や解説が興味深かったです。最後の登りは足が疲れましたが、案内無しに行くことは難しいコースを体験できてとても良かったです。

（大田区大人・女性）

瞳淵での飛び込み

飛び込み最高

岩の二つの大きさ、そして思いも寄らぬコケの貴重さなどにビックリしました。そして、ロッククライミングのような綱渡りがすごく印象深かったです。川なのに水深二メートル！飛び込みができた。これは本当に貴重な体験だと思いました。もうちょっと、日当たりがよいものだと思ったのですが水が冷たくて本当に焦りました。それでも、飛び込みは最高に楽しかったです！

（調布市子ども・女子）

プールの四倍冷たい

瞳淵で飛び込みを七回しました。学校のプールより四倍冷たかった。でもとっても楽しかった。最後の坂を登るのが大変でしたが、すごく面白かった。ここが東京の源の水であることがよく分かりました。

（三鷹市小三・男子）

下流の水もきれいに

登ったり、下ったりする時に滑るのが大変でしたが、川の水や飛び込みがすごく印象に残りました。下流の多摩川の水はすごく汚かったけれども上流はすごくきれいで、下流の水もきれいにしたいです。

（大田区小五・男子）

釜淵を越えて

冷たい水の中を歩くのが大変

美しい自然と美味しい澄んだ水が素晴らしかったです。子どもが生き生きと体験していた姿がとても良かったです。冷たい水流の中を歩くのは想像していたより大変だと感じました。また体験したいです。

（三鷹市大人・女性）

都会の多摩川とは違う

水の冷たさや綺麗さなど都会を流れる多摩川の水と異なり、水の本当の姿を実感することができました。ゴールの先はどうなっているのか興味がわきます。

（川崎市大人・男性）

シリーズ

多摩川下流の水害 ～其の二～

地域史研究家・多摩川流域ネットワーク代表　長島　保

筆者も、明治～大正期に限ってだが、多摩川洪水史年表をまとめたことがあるが、一覧して気付いたのは、明治後半から大正初頭にかけて、大水害が続発していることだ。

なかでも、一九〇七（明治四十）年、一九一〇（明治四十三）年と大水害が連続的に発生し、後者は近代多摩川水害史上最大の水害となった。この二つの大水害については、後に詳しく取り上げることにして、まず明治初期からの水害についてふりかえってみよう。

『大田区史年表』によれば、一八七三（明治六）年九月の暴風雨による六郷川の出水で、開通間もない東京～横浜間の汽車が不通となった。『横浜毎日新聞』も「多摩川相模川其外川々とも未曾有の洪水にて、川筋最寄りの村々水害に罹り候場所も少なからず」と報じた。

明治八年八月の暴風雨は、前年百八十数年ぶりに架橋された木橋の六郷橋（左内橋）を破損させた。このとき、川崎町周辺では六郷川と鶴見川が押し出して、棚を吊ってその中にもぐりこんで過ごす人家もあり、菅村から宿河原村方面（多摩区）では、ことごとく田畑が泥水をかぶったという。

（七）各所で堤防が決壊

明治十一年九月の暴風雨では、六郷・鶴見の両川が氾濫して「桑田海と為り」、川崎町で溺死者が出た。左内橋も流失し、汽車が運転を停止した。また、野村神奈川県令が川崎地方水災の状況の視察に赴いた。北見方村や諏訪河原村（高津区）では、冠水による田畑の被害が生じた。

明治十八年七月の水害では、六郷橋が流失している。両岸の田畑は一面泥海となり、多くの梨の樹が水没した。明治二十三年八月には、六郷川が「非常の出水」となり、左岸荏原郡（大田区）の堤防が決壊し、各村一面に氾濫した。

明治二十五年七月の水害でも、「多摩川筋の堤防決壊二三ケ所」（『東京市史稿・変災編3』）に及んだというが、川崎側の被害は明らかでない。

明治三十一年九月の暴風雨では、高津村久地（高津区）にて堤防が決壊して、二子、溝の口方面（高津区）が浸水し、二ケ領用水の宿河原取水口（多摩区）が大破損に及んだ。浅田神奈川県知事が水害視察に赴いている。

翌三十二年十月にも、六郷川の増水で川崎町で堤防が決壊して、田畑が冠水し、浸水家屋が出た。さらに、明治三十五年九月の出水では、川崎大森間の電車が不通となったほか、二ケ領用水上河原取水口（多摩区）が破損した。

明治三十九年八月には、六郷川の氾濫で係留中の砂利船百艘が流失し、架橋中の京浜電鉄専用橋の橋脚が押し流された。中原村平間（中原区）では堤防が決壊した。

（つづく）

（四）思いのままに流下して

一九〇六（明治三十九）年に測図の地形図を見てみると、かつての多摩川はその河身を大きく蛇行させて流れ、両岸に広大な氾濫原（河川敷）を有していたことがわかる。湾曲した道路や各所に散在する自然堤防、さらには河跡湖の存在などを見るにつけ、多摩川は両岸に広がる氾濫原を、思いのままに流れ走っていたものと思われる。

いくら両岸を探してみても、連続する長堤は見つからない。現在のように連続堤で閉じ込められてしまった河川ではなく、増水すれば両脇の氾濫原に湛水して、徐々に洪水を押し流す河川であった。したがって、集落の営みも、河川が形成した自然堤防などの微高地にくりひろげられていた。水塚を築いたり、小船を備えたりもした。とにかく人びとは、あばれる河川と巧みに付き合ってきた。

ところで、洪水氾濫が起こっても、被害を発生させなければ「水害」にはならない。洪水氾濫は、河川本来の姿なのだ。川筋に暮らすようになった人びとに、何らかの被害が及んだか否かで、水害となる。皮肉なことに、河川沿岸への開発が進むにつれて、水害の規模や頻度も増大したようだ。

多摩川流路の変遷や蛇行が分かる・明治14年測量の迅速図（『新多摩川誌』別巻　写真・図集から）

（五）頻発する洪水・氾濫

近世以前の多摩川洪水史年表は、久しく集大成したものがなかった。だが近年、増渕和夫氏の精力的な研究で、その全容が明らかにされた。二〇〇三年発表の『多摩川の洪水と環境変動―近世多摩川洪水史と完新世段丘―』（とうきゅう環境浄化財団研究助成）に収録された「多摩川洪水氾濫年表」だ。

この年表は、一五五〇（天文十九）年から一九二五（大正十四）年までの三百四十余年間にわたる洪水氾濫の記録を集大成している。何とここには、四百九件の事例が記載されていて、氏の解説は「多摩川本流の一・〇八七という頻度は、まさに毎年のように洪水氾濫が起きていたことを示」し、そのうち「洪水被害」（水害）が半分を占めたと言及している。

（六）明治期の水害から

秋のイベント紹介

自分でつくるから安心、うまい 干し柿体験ツアー

源流域では少子高齢化が進み、柿の実がなっても柿の木から柿の実をもぎ取ることは大変な作業で、ただ実が落ちるだけの木も多くなっています。しかし、ただ落としているだけではもったいない！

そこで、小菅村の景観維持と食文化の継承を目的とし、干し柿体験ツアーを行います。

干し柿作りは竹竿で柿をもぎ取り、その柿を干す過程までを行います。もちろん、後日完成した干し柿を皆様のお宅まで発送致します。自分で作った干し柿を堪能したい方、是非ご参加下さい。

日時／十一月十二日(土)～十三日(日)
集合／JR奥多摩駅 午前十一時
費用／一万三千円(宿泊費一泊四食・保険料など込み)
定員／三十名(先着順)
お申し込み・お問い合わせ
小菅村観光協会
☎0428-87-0741
※お申し込みは十月二十八日締め切りです。

手作りの味をあなたにこんにゃく作り体験ツアー

小菅村では平らな土地が少なく、畑の多くは山の斜面に作られています。このような畑で作られる作物にこんにゃく芋があります。

当然こんにゃくはこんにゃく芋を原料にして作られますが、市販されているこんにゃくはこんにゃく芋を粉末にしたモノを使用しています。今回のツアーでは茹でたこんにゃく芋を臼に入れ、杵を使ってすりつぶす昔ながらのやり方でこんにゃく作りを行います。こうして出来たこんにゃくは歯触りが抜群です。是非皆様の口で比べてみてください。

また、ただ体験するだけでなく、こんにゃく畑の見学や昔から続く源流域の生活をご紹介します。あなたもこんにゃく作りを通して、古くから伝わる源流域の暮らしに触れてみませんか。

日時／十一月十九日(土)～二十日(日)
集合／JR奥多摩駅午前十時
費用／一万五千円
(宿泊費一泊四食・保険料・こんにゃく作り体験料など込み)
定員／二十五名(先着順)
お申し込み・お問い合わせ
多摩川源流研究所 担当 中川
☎0428-87-7055
FAX 0428-87-7057
※お申し込みは郵便番号・ご住所・氏名・電話番号をご記入のうえファックスにてお願い致します。

手作りこんにゃくづくり体験

いろりばた教室で源流の民族を再確認

奈良県川上村 森と水の源流館
主事(民俗担当) 黄瀬 桂子

民俗講演会「いろりばた教室」は、吉野川紀の川流域、紀伊半島、全国の山地、川地をフィールドに、これらの地で生きる人々が、長い年月をかけて培った民俗を記録・保存、全国に発信していくことを目的に開催しています。この活動は、ひいては、民俗の立場から「源流」とは何か、を検証できると信じています。

前回まで、この地の埋もれた民俗に光を当てるべく様々なテーマで開催してきましたが、今一度「源流」に立ち戻って民俗を考えてみたいとの想いで、中村文明所長をお招きました。七月十日に「吉野川源流に魅せられて」と題して、現在作業が進んでいる「源流絵図 川上村版」の調査で“発掘”した村の伝承文化のこと、地名に刻まれた歴史など興味深いお話をしていただきました。また、多摩川源流のお話からは、大きなスケールで「源流」を捉える魅力を感じました。満員御礼の約50名の参加者からは、「多摩川の最初の一滴の写真、綺麗やったね」とか「川上村の魅力を教えられた気分や」「文明さんの血は源流の水でできてるんやわ。体の中に源流の水が流れてるんやわ」といった感想が聞かれました。

中村所長は「川上村の源流はスゴイっちゃね～」といってくださいます。とっても嬉しくなります。私も同感です！何がスゴイって、源流の村、ここ川上村の魅力は、豊かな自然と、そして何より自然と共生する知恵や技を持った魅力的な「人」がいます！そして、多摩川源流に仲間がいることも川上村の宝です。全国の源流を愛する人たちと、それぞれの「わが源流自慢」を語り合い、スクラムを組んで素敵な源流の村・人づくりをしていきたいとの想いを強めました。

いろりばた教室(7月10日 川上村)

第6回全国源流シンポジウムのご案内

北上川流域連携交流会（内閣府認証）NPO法人発足10周年記念事業

全国源流シンポジウムの目的

全国の河川源流域に関わる様々な分野の人々と交流し、源流域の自然・歴史・文化・国土保全の役割を広く周知・啓発するとともに、「源流は国民共有の財産である」ことの理解と共感を広め、より広範な源流ネットワークを構築し、源流域の環境保全や地域づくりに貢献することを目的にしています。

今回の「第6回全国源流シンポジウム」は、「森と水と人の繋がり」をテーマに、東北・北海道地方で初めて開催される全国源流シンポジウムです。源流は川の源であるばかりか、日本民族の文化や歴史の源でもあります。日本人にとって原風景ともいうべき源流の自然や文化から、多くのことを学び合い、後世にしっかりと伝えていきたいと考えています。皆様の積極的なご協力、ご参加をお待ちしています。

第6回全国源流シンポジウムの開催要項

●日　　時　2005年10月29日（土）30日（日）

●場　　所　岩手県盛岡市・盛岡劇場メインホール及び北上川上流地域

●会　　場　29日 12:30　盛岡駅集合 北上川体験 源流・流域・環境コース（有料）
30日　9:30　開会　記念講演、他　盛岡劇場メインホール（無料）

●記念講演　「森と水と人の繋がり」　作家　C.W.ニコル氏

●基調提案　「水循環と源流の役割」　東京大学助教授　沖　大幹氏

●パネラー　中村　文明　NPO法人全国源流ネットワーク代表
水戸部浩子　をんな川会議代表幹事
恵　小百合　江戸川大学教授
千坂げんぽう　北上川流域の歴史と文化を考える会会長
塚原　浩一　国土交通省河川局河川環境課河川環境保全調整官

●コーディネーター　達下　雅一　岩手日報社論説委員

●全体総括　平山　健一　岩手大学学長

●一日目　北上川上流を辿る体験型のイベント

●主　　催　第6回全国源流シンポジウム北上川大会実行委員会
（名誉会長 増田寛也岩手県知事　実行委員長 千坂げんぽう）

●共　　催　NPO法人北上川流域連携交流会　NPO法人全国源流ネットワーク

●後　　援　国土交通省・環境省・農林水産省林野庁・岩手県・宮城県

●申込み方法　下記、事務局まで「氏名・住所・電話番号」をお知らせ下さい。
（郵便・FAX・メールなど）参加申込書を送付致します。

●連絡先　第6回全国源流シンポジウム北上川大会実行委員会事務局
NPO法人北上川流域連携交流会内　（担当　小山田、小野寺）
〒029-0131　岩手県一関市狐禅寺字石ノ瀬155－81
TEL 0191－31－6331　FAX 0191－31－6333
E-mail ; kitakami@seagreen.ocn.ne.jp